

保育者・小学校教諭の子どもをほめる理由

青木直子（藤女子大学）

キーワード：保育者，小学校教諭，ほめ

問題と目的

保育者や小学校教師は、さまざまな理由から子どもをほめている。子どもをほめる理由に基づいて保育者と小学校教師の類型化を行った研究によると、さまざまな理由を意識して子どもをほめるタイプ、ほめる理由をあまり意識していないタイプ、子どもの態度や行動が変化することを意識して子どもをほめるタイプなどが存在することが指摘されている（青木，2018；2019）。

これらの研究は、保育者と小学校教諭が子どもをほめる理由について、職種ごとにクラスタ分析を行ったものである。そのため、職種ごとに異なるクラスタが見出されることになり、職種間の比較をすることが難しい。そこで、本研究では、保育者と小学校教諭のデータを合わせてクラスタ分析を行い、どのようなクラスタがみられるのか、また、職種によってクラスタの人数に違いがみられるのかなど、保育者・小学校教諭間の子どもをほめる理由の比較を行う。

方 法

保育者（166名）と小学校教諭（77名）を対象とした質問紙調査を行った。保育者のデータは、青木（2019）にデータを追加したものである。また、小学校教諭のデータは、青木（2018）と同様である。質問項目は、子どもをほめる理由（4件法）、子どもをほめる頻度（5件法）、保育者歴・教員歴などであった。なお、本研究は藤女子大学倫理審査委員会の承認を得ている。

結果と考察

分析は、子どもをほめる理由を問う40項目について欠損値のないデータを用いた。まず、子どもをほめる理由について因子分析を行ったところ、スクリープロットの状態から4因子構造が妥当であると判断した。第1因子は「その活動が好きになるように、ほめる」「その活動の楽しさを伝えることを意識しながら、ほめる」などの6項目が含まれていたことから、活動に対する態度変容因子と命名した。第2因子の6項目はすべて「子どもをほめるねらいは、子どもの能力を伸ばすことではない」「子どもに達成感を与えることを意識して、ほめるわけではない」など、ほめる理由を否定するものであったことから、ほめる理由に対する意識の低さ因子と命名した。第3因子は

「子どもの『認められたい』という気持ちに配慮して、ほめる」「ほめることで、子どもの感じている気がかりを減らすことができる」などの5項目が含まれていたことから、感情面への配慮因子と命名した。第4因子は「子どもの達成したことがらが優れた水準であることを伝えるために、ほめる」「ほめることで、子どもに“何がどこまでできているか”を伝えることができる」などの6項目が含まれていたことから、情報提供因子と命名した。

次に、標準化した因子得点を用いたクラスタ分析を行った。その結果、3クラスタに分類することが適切であると判断した。クラスタ1は、ほめる理由に対する意識が弱い群といえる。クラスタ2は、ほめることで情報を提供することは意識しているが、活動に対する態度を変化させることや子どもの感情面については意識していない点が特徴である。クラスタ3は、さまざまなほめる理由を意識している点が特徴といえる（Figure 1）。

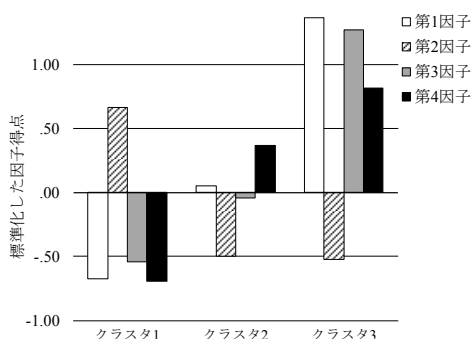


Figure 1 クラスタ分析の結果

さらに、各クラスタにおける保育者・小学校教諭の人数について、2（学校種）×3（クラスタ）のカイ二乗検定を行ったところ、有意差がみられ（ $\chi^2 = 7.01, p = .03$ ）、残差分析の結果、クラスタ2には小学校教諭が多く、保育者は少ないことが明らかになった。クラスタ2の特徴であるほめることによる情報提供は、メタ認知の活性化につながるものである。小学校、特に中学年になると、子どものメタ認知を活性化させる働きかけが重要になる。そのため、クラスタ2では、小学校教諭の人数が多かったと考えられる。